

だ。

三ピッチで赤岳鉾泉に着く。天幕を張った後、赤岳阿弥陀岳方面に向う。中岳のコルから阿弥陀岳は急で初心者には危かしいので、コルからもどることにする。途中の斜面を利用して、歩き方を教え、赤岳鉾泉にもどった。

タイム 略

☆一三日(日) 快晴 赤岳鉾泉ノ硫黄岳往復ノ己ノ戸

赤岳鉾泉の脇から硫黄岳に登る。山頂からの展望はさえないものがなく、三六〇度の展望をほしいままにする。写真を撮っている間に、風が強くなり、小さな小屋に入る。わたくしたち八名が入るといっばいで、他のパーティーは山頂に着くなり、直ぐに下山してしまう。三〇分程の休憩後下山し、赤岳鉾泉に向う。

天幕を撤収して二ピッチでバスの待っている己ノ戸口に着いた。(塚田 信正)

タイム 略

1781 御前山中尾根

小屋掛けのある所から左にまく。巻き道が小尾根を越える所で、小尾根の方へルートをとる。車の所へ真直ぐ下りたいのと、沢へ降り、あわよくば今夜の酒の肴「ヤマメ」でもと思ったのである。

枝打ちの枝がいっぱいの尾根を下ると、左側に偶然細い踏跡をみつけた。他の季節なら絶対にわからぬほど細いものである。しばらくは尾根をもどり気味に、行き、沢に降りるのだと思ったら、小尾根について下りはじめた。仕事に通うらしくよく刈払いしてあった。やがて本流の水ノ戸沢に下りつき、時々竿を出しながら下ったが、今夜の肴は収獲なしであった。立派な歩道を水ノ戸沢出合まで戻った。(安富 芳森)

タイム 中尾根取付7・40 主線縦9・20 40 御前山10・02 湯久保尾根から支尾根へ10・43 水ノ戸沢出合(尾根取付)11・50

1782 皇海山 (春山合宿)

期日 三月一九日(出)二一日(帰)

参加者 甲山CJ 藤井SL 永井 齊藤田 以上四名

期日 三月一三日(日) 曇

参加者 安富L 以上一名

報告

車で神戸岩方面へ入り、尾根のほぼ末端、水ノ戸沢と本流との合流点の橋ノ堰下橋から歩きはじめる。古い神戸岩キャンプ場のバンガローのわきから登る。冬の終りの頃の暖かい空気にピッチもはかどる。道は、スギヤヒノキの枝打ちに通つたらしく割合しつかりしている。

やがてまだ植えたばかりのヒノキの造林地をすぎ、急になると、主脈の縦走路に出た。白い道標とベンチがある小ピークである。テルモスに入れて来たお茶がうまい。新人の時の夏山トレーニングなど思い出しながら、御前山へと向う。道はまだ完全に溶けきらず、泥が足につかずに歩きやすい。

避難小屋の分岐をすぎ御前山山頂に着く。誰もいない。北面のカラマツ林の間から、鷹ノ巣などのシルエツトが美しい。少し西側の展望の良い所まで行って、先週の月夜見沢を眺めた。

帰路は、湯久保尾根をとる。しばらく下り、簡単な

報告

☆三月一九日(出) 曇

人骨の浮くと言われる(?)渡良瀬川ぞいに足尾線の車中でしばしまどろむと突然永井に起こされ、通洞駅に着いた事を知る。足尾の町で一台しかないタクシーをひろい、かじか荘の終点へ着いたら九時であった。キスリングにビッケルとワカンをつけ、林道をはると、一時間半で庚申山の登り口一の鳥居へ着いた。登山道は庚申山神社への参道でもあるのできわめて整備され、雪もとけている。鏡岩で一服し、もう一ピッチ登ると猿田彦神社跡に快適な幕営地を見つけ、ここで今日の行動を終える。ここから明日は皇海山まで早出で残業だ。設営を終ったところへ庚申山荘のおやじが突然犬をつれてあらわれ、立ち退きを命じられたが、OMCの名がきいてか張りかえられることなくすんだ。今後いく人は山荘のおやじに注意された方がよい。

(藤井 諭)

タイム かじか荘9・30 一の鳥居11・00 鏡岩11 45 猿田彦神社跡(幕営地)13・00

☆三月二〇日(日) 晴

予定通り三時に起きてベンチレータをのぞくと星が見える。今日はいただきと足どりも軽く天幕を後にする。凍っていた雪面にアイゼンが小気味よい。庚申山はすぐだと思っていたが、昔の信仰登山の山らしく、岩場が多く時間をとられ頂上にあがる前に日の出を迎えた。庚申山頂でおどけてカメラをかまえたり、のんびり楽しい気分で鋸山への稜線へ向かう。御岳山、地藏岳、蔡師岳、白山、蔵王岳、剣の山、鋸山と、セビツチ毎に現われる小ピークにすべて有名な山名がついており、ずいぶん歩いた気になるが、たかが長さ一キロメートルの稜線である。もつとも、道が岩まじりで悪く、けっこう時間はかかった。ピラミッド状のかっこうのよい鋸山の山頂は、猫の額ほどにせまく、ながめがよい。皇海山へはいったんコルに下りて登り返す。雪も、もも位の深さで、最後のピッチは例によってバテバテで、やっとの思いで樹林の中の山頂についた。時間もないので三十分後に下りはじめた。鋸山へ登り返す所が急な雪面で、雪崩に注意が必要である。雪が腐りはじめ、アイゼンがダゴになって歩

☆三月二一日(日) 晴

昨日の疲れでぐっすり眠り、快適な朝をむかえる。今日は帰るのみでいたって楽なスケジュールだ。一気に一の鳥居へ下り、ここで滝見物を楽しむ。三日のうちで最も好天日となり、帰るおしあかつたが一路かじか荘へ向う。駅では時間もわり、しばし昔の鉾山町のなごりを味わった。(藤井 諭)
タイム 暮营地6・30ー一の鳥居7・30ーかじか荘8・30(解散)

1783 日山協第二種指導員検定試験(八ヶ岳)

期 日 三月二〇日、二一日
参加者 塚田(備) 以上二名
報告

☆二〇日(日) 快晴 己ノ戸口ー赤岳鉾泉ー行者小屋
前夜二一時、八王子南口に指導者の柴山氏と鈴木氏と待ち合わせ、赤いヘルメットで中央道を飛ばし、己ノ戸口に向う。
今回の検定員は主任検定員が田中氏(雲表)、それ

きにくいので、アイゼンはずしたが、今度は表面がかたくとも内側がやわらかい雪質のため、三歩歩いて一穴溜るような調子でどうもはかばかしくない。そこでまた一本立ててワカンをつけ、そろりそろりと潜らないように六林班峠へ向かう。峠は静かなムードの好ましい場所である。ここからは庚申山荘まで、道が山の中腹をほぼ水平にジグザグに切られているがあまり整備されておらず、所々崩れており、また例の雪質のため苦しめられる。バテて声もなく、大きな支尾根を越した所で小屋まで何分位か、ピールをかけようといつて一〇分ほど歩いたら小屋が見え、大笑いをした。

天幕にころがり込みほつと一息、久しぶりに歩いた雪は顔で味わうものだと感懐にふけた。(要するに歩いたんびに雪につんのめっていたのです。)
(永井 正敏)
タイム 暮营地5・20ー庚申山6・20ー35ー鋸山9・00ー10ー皇海山10・35ー11・00ー鋸山12・00ー20ー六林班峠13・35ー暮营地16・40

に坂口氏(同志会)、柴山氏(岳嶺)、鈴木氏(雲表)と私の五名。受験者が一二名。三班に分かれた。己ノ戸口から北沢沢の道を赤岳鉾泉に向かう。これから指導員になろうとする人達にしては、全くスロースペースだ。先週の登山教室の参加者は今回の人達に比べたなら全くの素人といつてもいい位だが、積雪が多いにもかかわらず、三分の二位の時間で赤岳鉾泉に着くことができた。

赤岳鉾泉でスキーを履いて行者小屋に向う。中山乗越直下の急登で相当バテたようだ。中には検定員にザックを背負ってもらう者もでてきた。
行者小屋脇に天幕を張るが、モタモタして一時間以上もかかっている。

阿弥陀岳北稜下部でワカンを履いての歩行と雪洞の掘り方を見て行者の天幕にもどる。(塚田 信正)
☆二一日(日) 快晴 行者小屋ー中岳コル往復ー己ノ戸口
行者小屋から中岳コルをめざす。コルまでキックスアップ。コルの南側の急斜面を利用して、歩行、兩時登攀、連続登攀、装備点検、滑落停止などを行なった。